

# 将来までつなごう 支援と相談のバトン

～切れ目のない縦の連携を目指して～



この冊子はどこから読んでもOKです。

小さいおさんと触れ合うことが多い方も、ぜひ青年期までの生活について考えるうえで参考にして下さい!!

## もくじ

つながってよかった !!	1
生涯にわたる連携ツール	3
「幼稚園・保育所・認定こども園等→小学校」をつなぐ	5
「小学校→中学校」をつなぐ	9
「中学校→高等学校等」をつなぐ	13
「高等学校等→卒業後の生活」をつなぐ	17



# つながって

全てのライフステージを通して

充実した支援

ていねいな相談

充実した支援を引き継ぐ



やりとりがうまく  
いかず一人ぼっち  
のことが多かった  
○○君

## 幼稚園・保育所・認定こども園 小学校

### 充実した支援

大人が気持ちを代弁しながら遊びの輪に入れるように働き掛けしました。

### ていねいな相談

揺れ動く保護者の気持ちに寄り添い、  
安心できるように相談を重ねました。



## 中学校

### 充実した支援

コミュニケーションを中心に SST\*1 を実施しました。

### ていねいな相談

高校生活について何度も相談を重ねました。  
担任も一緒に高校見学をしました。

\*1 SST (ソーシャルスキルトレーニング)  
社会生活に必要な力の伸長を図る学習

## 幼稚園 保育所 認定こども園 等



つなぐ

## 小学校

通常の学級  
通級指導教室  
特別支援学級



つなぐ

## 中学校

通常の学級  
通級指導教室  
特別支援学級



つなぐための  
おすすめツール

7  
ページ

個別の教育支援計画作成  
のための基礎資料

11  
ページ

個別の移行支援計画  
(学齢期用)

16  
ページ

生涯にわたる  
連携ツール

3-4  
ページ

サポートファイル

個別の教育支援計画

# よかったです!!

ていねいな相談を引き継ぐ

充実した支援

ていねいな相談



引き継ぎ

高等学校等

充実した支援

担任や教科担当が話し相手になりました。  
友達との間をつなぐ働き掛けをしました。

ていねいな相談

得意なところを生かした将来の生き方について、時間をかけて相談を重ねました。

将来の  
充実した  
生活

引き継ぎ



高等学校等



特別支援学校  
高等部・高等学園



つなぐ

大学  
専門学校 等

一般就労  
(障害者雇用制度活用の場合も)

福祉事業所

障害者職業  
能力開発校

福祉事業所 (就労系)



福祉事業所 (生活介護系)

高連携  
ポートシート

20  
ページ

個別の移行支援計画  
(卒業期用)

個別の支援計画

# 生涯にわたる

## 個別の教育支援計画の作成と活用

本人や保護者、関係機関と学校が話し合うなどしながら、連携して作成します。

### 実態把握：Assessment

本人の状況や状態を把握し、願いを聞き取ります。

### 計画：Plan

将来の生活を想定した目標を設定し、各機関の役割や支援内容・方法を考えます。

### 評価・改善：Check

学期末などの節目を一つの区切りとして、「支援が適切に行われているか」「目標や指導方法・内容が適切だったか」を評価し、見直しを行います。

### 活用：Do

個別の指導計画づくりや授業づくり、学級づくりに活用します。支援会議や移行支援にも活用することができます。

## 個別の支援計画

障害のある子どもを生涯にわたって支援

- 一人一人の教育的ニーズを把握
- 関係者や機関の連携による適切な教育的支援を効果的に実施



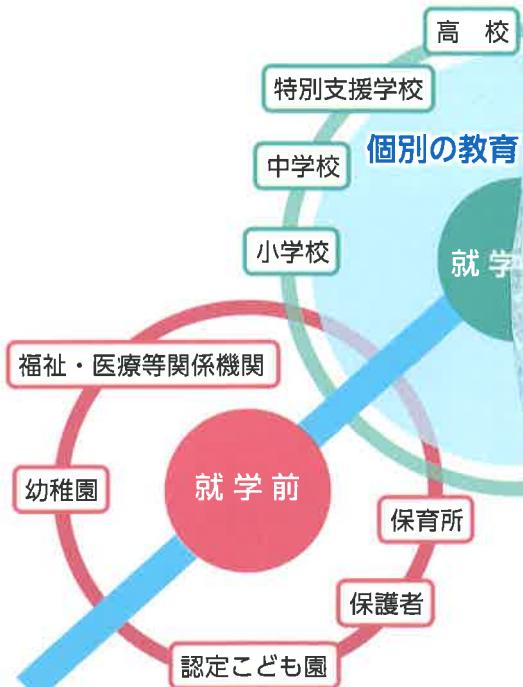
個別の教育支援計画

【平成28年度 個別の教育支援計画】

学年	1	児童生徒氏名	○○○○	作成日	28年5月10日	作成者	○○○○
本人の願い		・みんなと仲良く過ごしたい。		保護者の願い	・友達と仲良く過ごせるようにならほしい。 ・根気と集中力をつけさせたい。		
長期的な目標		・社会生活に必要な学力の定着。 ・コミュニケーション能力を高める ・適応の幅を広げる		今年度の目標	・足し算・引き算ができる。 ・簡単な本を読み、楽しむことができる。 ・学年・学級の友達と関わって遊ぶ。		
主な合理的配慮の要点		・座席は前方の静かなところへ置く。 ・クーラダウンできる場所を確保しておく。					
(①現在の支援・②課題やユーズ・③支援目標・④内容・⑤方法・⑥期間)				連絡先・担当者	評価と引継ぎ		
医療							
福祉	①適切な支援方法の助言と保護者への相談。		北部アーチル ○○さん	良好な関係にあり、保護者は助言を積極的に受け入れ。児童への支援に役立てている。			
教育	①個別指導をしながら、ラボート作り。 ②文字に興味はあるが読みが定着していない。 ③ひらがな50音を読めるようにする。 ④読み聞かせをきっかけに、読むことに取り組ませる。		担任 ○○○○	お話を好きで、読み聞かせは集中して聞いている。文字はほとんど読めない。			
地域							

※実態、教育的ニーズ、支援の目標、連携の内容・方法、評価と改善、引継ぎや留意事項などを記入します。

※様式は、グループウェア→文書管理→特別支援教育課→個別の教育支援計画 から入手できます。



## コラム

### 「個別の支援計画」と「個別の教育支援計画」

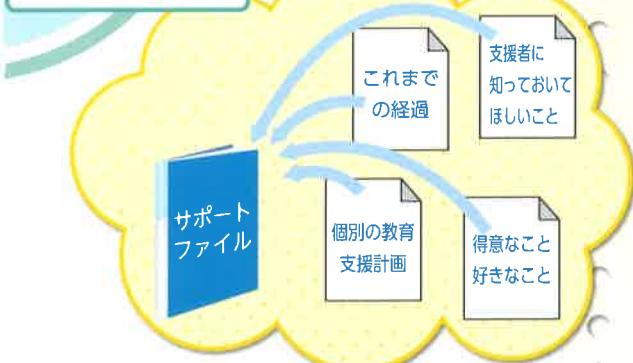
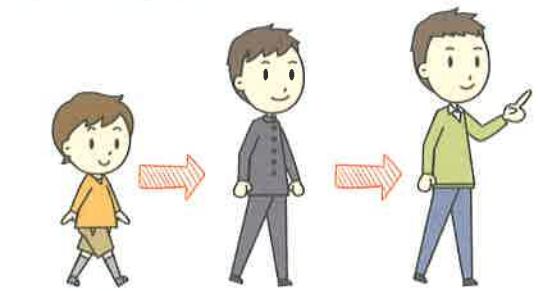
#### ■「個別の支援計画」とは

乳幼児期から学校卒業後までの長期的な視点に立って、医療、保健、福祉、教育、労働等の関係機関が連携して、障害のある子ども一人一人のニーズに対応した支援を効果的に実施するための計画のこと。

「個別の教育支援計画」は、「個別の支援計画」を教育機関が中心となって作成する場合の呼称。

(詳しくは平成26年度版「仙台市の特別支援教育」p74-79：第4章第2節 個別の教育支援計画 参照)

# 連携ツール



## 個別の教育支援計画を作成する対象は

- 特別支援学校在籍の幼児児童生徒に対しては作成が義務づけられています。
- 特別支援学級や通常の学級において特別な配慮が必要な幼児児童生徒も作成の対象になります。

## (仙台版) サポートファイルとは

- ◆ 発達の様子や受けている支援の内容を記録したり、保護者と学校や支援者が話し合って作成したお子さんに関する資料（個別の支援計画など）を綴じたりするファイルです。
- ◆ ファイルは、保護者（本人）が作成・管理・保管します。
- ◆ ファイルは何歳からでも作成できます。作成していなければ、保護者に作成を勧めてみるのもよいでしょう。

## サポートファイルには



- ◆ 「実態」に関する情報が記載されている！  
→ 個別の教育支援計画作成の際に活用できる。
- ◆ これまでの支援の経過、成長の様子がうかがえる！  
必要な支援のポイントが記されている！  
→ 一貫した支援が可能になる。
- ◆ 将来必要となるかもしれない情報を蓄積できる！  
(たとえば、障害基礎年金等の申請時などに、これまでの経過の記載を求められることがあります。)

## サポートファイルの活用方法

- ◆ 支援を始めるときは（ファイルを作成していれば）保護者からファイルを見せてもらいましょう。
- ◆ 他の支援機関での支援状況を確認しましょう。
- ◆ 保護者と相談しながら支援内容を確認し、支援計画を作成しましょう。
- ◆ 支援計画を作成した場合は、保護者に渡してファイルに綴じてもらいましょう。

※ 保護者（本人）がファイルの作り方や使い方に迷っているようなときには、アドバイスをお願いします。

※ ファイルには、個人情報や他の支援機関の情報も含まれています。取扱には十分な配慮をお願いします。

- ◆ 統一した様式は定めていませんが、様式例や記入例は、下記ホームページに記載しています。ご覧ください。

### 仙台市発達相談支援センターHP

<http://www.city.sendai.jp/kenkou/hattatsu/gaiyou/>

### 仙台市HP（支援をつなげるしくみ「サポートファイル」）

[http://www.city.sendai.jp/fukushi/shogai/sodan/1212835\\_1695.html](http://www.city.sendai.jp/fukushi/shogai/sodan/1212835_1695.html)

# 「幼稚園・保育所・認定こども園等→小学校」をつなぐ

## 1 「幼保等 → 小学校」をつなぐ【必要性】



### 小1プロブレム<sup>※2</sup>軽減のために

小学校への入学は、子どもにとってとても楽しみなことであり、準備したランドセルを背負って登校する日を心待ちにしています。しかし、いざ小学校での生活が始まると、子どもは大きく変わる環境にとまどったり、学校生活のリズムについていけなかったりして、その結果「小1プロブレム」の状況を呈する場合があります。

大人にとっては当たり前と思うような小さなことでも、子どもにとっては高いハードルとなり、落ち着かない原因になったり、不安になります。障害のある子どもにとってはなおさらです。

例えば・・・

#### ★45分間着席している



動きたいなあ…

#### ★上靴を履く



裸足でいたいな…

#### ★和式のトイレ



使い方がわからない…

そこで、幼稚園・保育所・認定こども園等（以下、幼保等）と小学校間で子どもが感じるハードルを少しでも低くできるような取組が始まっています。仙台市では、そのような意図から平成23度より、「仙台市スタートカリキュラム」<sup>※3</sup>の取組も始めています。幼保等と小学校が互いのことをよく知り、入学時にはていねいな引継ぎが行われるようになってきました。

※2 小1プロブレム：小学校に入学したばかりの1年生が集団行動を取れない、授業中に座っていられない、話を聞かないなどの状態が続くこと。

※3 仙台市スタートカリキュラム：小学校入学時にスムーズな適応を図るためにカリキュラム構成。

## 2 「幼保等 → 小学校」をつなぐために【おさえたいこと】



### （1）小学校の教員が知りたい子どもの情報

- どんなことが好きか、得意か。
- どんなことが苦手か、できないか。
- 身辺処理はどの程度できているか。
- 文字や数にどの程度興味があるか。
- 一斉指示をどの程度理解できるか、個別の支援はどの場面でどの程度必要か。
- 対人関係のトラブルはどの程度あるか、どんなトラブルが多いか。
- これまでにどんな支援やどんな相談が行われてきたか。



など

### （2）保護者の情報も大切

- 保護者が子どもの実態をどのように理解しているか（どのように障害を受けとめているか）。
- 幼保等が保護者との相談において配慮してきたことは何か。

### ③ 「幼保等 → 小学校」をつなぐための【具体的取組】

幼保等から小学校へスムーズな移行ができるように、仙台市教育委員会や各小学校区において次のような取組がなされています。

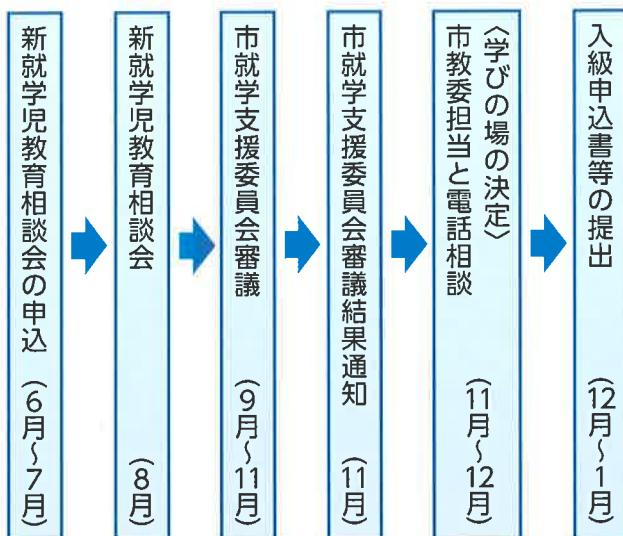
#### 〈取組の参考例〉

時 期	名 称	内 容	対 象
8月	幼保小合同研修会	幼保小の相互理解や連携のための情報交換	幼保小職員
9月	第1回幼保小連絡会	1年生の授業参観と小学校生活の説明、情報交換	幼保小職員
11月	就学時健康診断	健康診断、教育相談、子育て講座	園児・保護者
12月～1月	学校見学または交流会	1年生の授業参観(交流)と学校見学、校長先生のお話など	園児
1月末	第2回幼保小連絡会	入学予定園児の引継ぎ、情報交換	幼保小職員
2月	「個別の教育支援計画作成のための基礎資料」送付(市教委⇒各小学校へ)		保護者
2月	新入学保護者説明会	小学校生活についての説明、質疑応答、教育相談など	保護者
入学前	学校見学	小学校に慣れるための教室見学など	園児・保護者

※ 2月～3月には、各小学校が幼保等を訪問し、個別の配慮を要する園児の様子を参観し、実態把握や情報共有を行っています。

#### ●新就学児の就学先決定までの流れ

- ・障害のある幼児
- ・特別支援学級や特別支援学校での学びを検討する幼児



詳しく述べ、「お子さんにふさわしい学びの場を考えるために一就学相談ガイド（仙台市教育委員会）」を参照してください。



## 4

## 「幼保等 → 小学校」をつなぐための【おすすめツール】

### (1) 「個別の教育支援計画作成のための基礎資料」

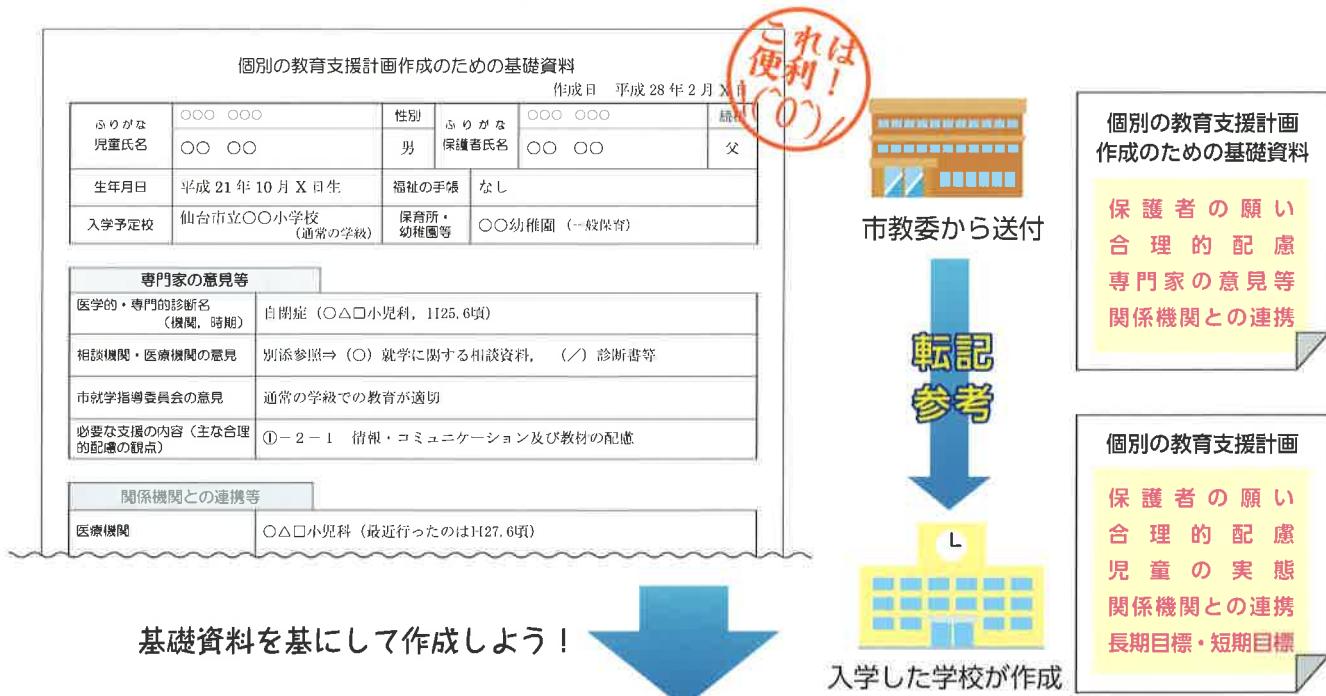
8月の新就学児教育相談会に参加し、保護者がその資料を入学予定の小学校や特別支援学校に提供することを希望した場合、市教委から各学校へ2月上旬以降に送付される資料です。

この資料には次の内容が含まれています。

- 専門家の意見
- 関係機関との連携
- 保護者の思い
- 合理的配慮
- 相談機関からの就学に関する資料
- 幼保・通園施設等からの就学相談資料



- ◆ 実態把握が入学前にできる！
- ◆ これまでの経過や支援・配慮等がわかる！
- ◆ 保護者と会うときには、資料を基に「これから」を話し合うことができる！
- ◆ 個別の教育支援計画が早い段階で作成でき、適切な支援がすぐできる！



### (2) 個別の教育支援計画

※概要は3ページを参照。

- ◆ 保護者も参加して作成します
- ◆ 児童の障害の状態等に関わる情報を共有できる！
- ◆ 指導の目標や内容が明確にできる！
- ◆ 関係者の役割分担が明確にできる！
- ◆ 関わる人たちが同じ方向を目指して支援できる！

## 5 「幼保等 → 小学校」が【うまくつながった事例】

## 事例 幼稚園→小学校の通常の学級

子どもについて	<p>▶自閉症の男子。思ったことをすぐに言ってしまったり、思うようにいかないとパニックになり奇声を発したりすることがあった。友達とトラブルになることもあった。別室でクールダウンすることもあった。</p>
小学校入学後に予想されたこと	<p>▶保護者は小学校で新しい友達と仲良くなれるか、落ち着いて生活できるか不安があった。</p>
具体的に取り組んだこと	<p>▶新たな環境になかなかなじめず、気持ちが落ち着かない。奇声を発することが増える。</p>
	<p>▶相手の気持ちを考えて発言することが難しく、友達とトラブルになる。</p>
小学校入学後の様子	<p>▶9月……第1回幼保小連絡会で保護者からの同意を得た上で幼稚園側が発達障害があることを小学校側に伝えた。</p>
	<p>▶11月……学校は就学時健康診断の際に保護者から詳しく実態を聞き取った。</p>
	<p>▶1月末…通常の学級で学ぶことが決まった後、第2回幼保小連絡会の際に幼稚園担任と小学校が詳しく情報交換をした。</p>
	<p>▶4月……個別の教育支援計画作成のための基礎資料を参考に、担任・特別支援教育コーディネーターが改めて保護者と教育相談し、個別の教育支援計画を作成した。また、クールダウンできる場所を本人と一緒に決めた。</p>
	<p>▶担任が本人の特性を理解し、良さを褒める指導を心掛けた結果、落ち着いて楽しそうに過ごしている。</p>
	<p>▶たまにうまくいかないことからパニックになり、奇声を発することがあるが、担任が穏やかに本人に接するのを見て、学級の他の児童も穏やかに接している。</p>
	<p>▶本人が楽しそうに学校に通っており、担任とも相談しやすい関係ができているため保護者は安心している。</p>

コラム

幼保小連絡会ではポイントを絞った聞き取りを

幼保小連絡会の際、幼保等の先生から一人一人詳しく説明を受けるあまり、特に配慮が必要な子どもが誰なのか小学校側が捉えにくくなることがあります。特に配慮が必要な子どもについて、連絡会の中でしっかりと把握し、より詳しくその子どものことを聞き取るために、まずはポイントを絞ることが有効です。

- 先生の話を聞いて行動できるかを把握するために  
「おあつまり」の時に、先生の声掛けだけですぐに自分の椅子に座れますか？
  - 集団生活を円滑に過ごしていくかを把握するために  
「順番は守れますか？」
  - コミュニケーションの発達を把握するために  
「遊びの中で役割分担はできますか？」
  - トラブルや困っていることに対して、有効な支援方法を把握するために  
「具体的にどんなときにどのように支援するとよいですか？」
  - 配慮が必要な児童の場合、親と連携して支援していくことが多くなるため  
「保護者がどのように障害を受けとめているか教えてください。」



# 「小学校→中学校」をつなぐ

## 1 「小学校 → 中学校」をつなぐ【必要性】

### (1) 意外と知らない？お互いの学校のこと

小学校と中学校は様々な面で交流があります。しかし、小中の教員がお互いの学校のことについて知らないこともたくさんあります。

中学校に入学すると、子どもは様々な変化に対応しなければなりません。子どもにとっての負担感は大人の想像よりも大きいことはよくあります。

障害のある子どもたちにとってはなおさらです。まずは、小中の教員がそれぞれの学校生活について詳しく知ることが必要です。

教科ごとに先生が変わって授業についていけるだろうか??



友達や部活の先輩とうまくやっていけるだろうか??

### (2) 中学校進学後を見据えた支援と相談

小学校の教員が中学校の学校生活について詳しく知っていれば、小学校高学年頃から、中学校進学後のことまで見据えた支援や相談ができるようになります。子どもへの具体的な支援の仕方も変わってくるはずです。保護者との教育相談の内容もより深いものになるのではないかでしょうか。

中学校進学後のことを見据え、小学校の校内支援委員会に学区の中学校教員に参加してもらうなど、これまでになかった発想も生まれてくるかもしれません。

子ども自身の  
「できる」・「得意だ」を  
伸ばそう

小学校卒業までに  
こんなスキルも身  
に付けさせたい



## コラム

### 普段からの良好な関係づくりが大切！

小学校から中学校への移行をうまく行うためには、学区の小中学校が常に情報交換できる関係を築いておく必要があります。

地域や小中学校の様々な行事、研修会などを通じて、教員が校種を越えて顔見知りになっておくことは効果的です。特に、生徒指導担当、養護教諭、特別支援教育コーディネーターなど、校務分掌のつながりを生かした情報交換は、大変重要になってきます。こうしたつながりは、特別支援教育以外の面でも、大きな効果が期待できます。特に授業を互いに参観することはたいへん有効です。



## 2

## 「小学校→中学校」をつなぐために【おさえたいこと】



## (1) 中学校の教員が知りたい子どもの情報

中学校の教員は、小中連絡会をはじめとした情報交換で、次のような具体的な情報を求めています。

- どんなことが好きか、得意か。
- どんなことが苦手か、できないか。
- 読み・書き・計算はどの程度できるか。
- 一斉指示をどの程度理解できるか、個別の支援はどの場面でどの程度必要か。
- 対人関係のトラブルはどの程度あるか、どんなトラブルが多いか。
- これまでにどんな支援や相談が行われてきたか。
- 子どもの姿が顕著に表れているノートや作品のコピーはないか。など



## (2) 保護者の情報も重要

中学校では、1年時から進路選択に向けた相談・情報提供をしていきます。それは、本人・保護者と少しずつ進路選択の話を進めていく必要があるからです。次の二つが重要になってきます。

- 保護者が子どもの実態をどのように理解しているか(どのように障害を受けとめているか)。
- 保護者が進路選択の見通しをどの程度もっているか。

## (3) 3月の小中連絡会だけでは不十分

どの中学校区でも3月には小中連絡会が行われます。しかし、限られた時間の中で子どものすべての情報を引き継ぐことは難しいので、次のような取組をおすすめします。

- 発達障害の子どもやその疑いがある子どもについては、年度途中でも情報交換する。
- 連絡会で伝えきれなかった内容を引継ぎ資料にまとめておく。
- 必要があれば、連絡会後にも追加で情報交換する。

## (4) 入学前の見学や相談が有効なケースも

中学校入学が近づくにつれて、子どもや保護者の不安や心配が大きくなっていくケースもあります。その場合には、次のような取組が有効です。

- 小学校卒業前に子どもと保護者が一緒に中学校を見学する。
- 中学校入学前に中学校の特別支援教育コーディネーター等が、教育相談を行う。
- 環境の変化が苦手な児童については、入学式直前に、教室や体育館、くつ箱の位置などを確認する機会を設ける。

### ③ 「小学校 → 中学校」をつなぐための【具体的取組】

ある中学校区では、「小6→中1移行支援プログラム」として、次のような具体的取組が1年間を通して行われています。どんな取組を行えるかは、それぞれの中学校区で異なりますが、小中連携の一環として、できうことから取り組んでみることをおすすめします。

#### 〈取組の参考例〉

時 期	内 容	対 象	時 期	内 容	対 象	
6月～	研究授業の相互参観	教職員	1月	小6授業参観	教職員	
7月	中学校で授業体験	小6児童		中学校教員の出前授業	小6児童	
	中学校ガイダンス			SC情報交換会	教職員	
	第1回小中連絡会	教職員	2月	関係機関を含めたケース会議 (必要に応じて)	教職員	
8月	部活動見学	小6児童		中学校と合同の行事に参加	小6児童	
夏	養護教諭情報交換会	教職員		第3回小中連絡会	教職員	
12月	第2回小中連絡会	教職員	3月	コーディネーター情報交換 (引継ぎ様式の検討も)	教職員	
1月	中学校行事への参加	小6児童				
	中学校説明会	小6保護者				
	希望者対象教育相談	小6保護者				

 ポイントは、小中の特別支援教育コーディネーター同士が、隨時つながっていることです。  
何気ない情報交換の中に、小中連携のきっかけがたくさんあるはずです。

### ④ 「小学校 → 中学校」をつなぐための【おすすめツール】

#### 個別の移行支援計画（学齢期用）

「個別の移行支援計画」は、校種間の引継ぎにおすすめのツールです。

右にあるのは、様式の一例であり、それぞれの学校の取組に合わせて、独自性があって構いません。また、既にある資料を移行支援計画とすることもできます。



個別の移行支援計画（学齢期用） 小学校→中学校				
ふりがな 氏名	○○ ○○	年 6	組 1	担任名 □□ □□
診断名	A D H D の疑い (校内判断)		手帳	療育手帳（なし） 精神手帳（ ） 身障手帳（ 種 級） [ ]
検査実施結果	WISC-IV (〇〇年〇月 〇〇センター) FSIQ: 99 VCI: 111 PRI: 109 WMI: 85 PSI: 83			
本人の様子・好きなこと・苦手なこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業に集中できている時とそうではない時の差が大きい。</li> <li>社会（特に歴史）が好き。算数（特に文章題）は苦手。</li> </ul>			
コミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> <li>仲のよい友達に各学校で様々な様式が使われて</li> <li>伝えたいことをいます。この様式は一例です。そ</li> </ul>			
その他・配慮事項 ・不安定になる原因等	<ul style="list-style-type: none"> <li>かっとなると手</li> <li>れぞれの学校や地域の実情に合わせて工夫してください。</li> </ul>			
主な合理的 配慮の観点	<ul style="list-style-type: none"> <li>大切な情報は視覚的で読み取れるようにしておいてください。</li> <li>クールビズなど季節変化を確保しておく。</li> </ul>			
現在・将来についての希望				
本人 公立高校への進学を希望している。	保護者 高等支援学校とサポート校を視野に入れています。	家庭の支援		

※様式は、グループウェア→文書管理→特別支援教育課→個別の教育支援計画 から入手できます。

## 5 「小学校 → 中学校」が【うまくつながった事例】



### 事例 1 小学校の通常の学級→中学校の通常の学級

子どもについて	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 小6女子。アスペルガー障害。</li> <li>▶ 小5まで対人関係のトラブルが多くあった。小6でトラブルは少し減ったが、独自の考え方（こだわり）があった。</li> <li>▶ 本人・保護者とも、中学校生活に様々な不安や心配があった。</li> </ul>
中学校入学後に予想されたこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 新たな環境になじめず孤立する。</li> <li>▶ 良かれと思ってとった言動が周囲に理解されず、トラブルになる。</li> </ul>
具体的に取り組んだこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 小6の冬………小中学校的教員が情報交換を行った。</li> <li>▶ 中学校入学前…小学校の担任も同席して、本人・保護者と中学校の特別支援教育コーディネーターと養護教諭が教育相談を行った。</li> <li>▶ 中学校入学後…中学校的担任と学年主任が改めて教育相談を行った。</li> </ul>
中学校入学後の様子	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 本人は、わからないことは教員に質問するなどして、不安を解消できている。</li> <li>▶ トラブルはあるが、ある程度予測できるので、学校は迅速に対応できている。</li> <li>▶ 保護者は、学校が本人の特性を理解してくれていることで安心しており、気軽に情報交換できている。</li> </ul>

### 事例 2 小学校の特別支援学級→中学校の特別支援学級

子どもについて	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 小6男子。広汎性発達障害。自閉症・情緒障害学級に在籍した。</li> <li>▶ 変化に柔軟に対応することが難しい。何か変更があると落ち着かなくなることがあった。</li> </ul>
中学校入学後に予想されたこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 新たな環境になじめず落ち着かない。</li> <li>▶ 「自分はダメだ」と自己否定が始まり、自己肯定感が低下する。</li> </ul>
具体的に取り組んだこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 小6の秋から…小中学校的教員が情報交換を行った（小中学校的教員が会った時に毎回）。</li> <li>▶ 小5から………小学校の担任も同行して、本人・保護者が中学校的特別支援学級の授業見学と体験をした（複数回）。</li> <li>▶ 中学校入学前…中学校的特別支援教育コーディネーターや特別支援学級担任が教育相談を行った（複数回）。</li> </ul>
中学校入学後の様子	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 本人は、「中学校は大変だけど楽しい」と言いながら毎日登校している。</li> <li>▶ 落ち着かなくなることもあるが、中学校は、小学校から引き継いだ支援策を生かして対応できている。</li> <li>▶ 保護者は、「スムーズに中学校的スタートを切れた」と安心している。</li> </ul>

# 「中学校→高等学校等」をつなぐ

## ① 「中学校→高等学校等」をつなぐ【必要性】

高等学校等では、広範囲の地域から生徒を受け入れるため、小学校と中学校のように関係を密にするのが難しくなります。生徒自身の行動範囲や交友関係も広がるため、それによって生じる本人の生活への影響にも注意が必要です。

引継ぎでは、高等学校入学の機会に中学校と高等学校とが確実に情報を共有し、入学後に生徒が円滑な学校生活をスタートできるように支援することが大切です。



### (1) 早めの進路指導・進路相談と適切な進路選択

中学校では、高等学校個々の理解を深めるだけでなく、生徒自身に中学校と高等学校の違いを理解させるとともに、自己理解の程度や高等学校の校風や学科等の向き不向き等を考慮しながら進路指導を進めることができます。生徒が高等学校生活の意義について理解を深めることにより、学校生活への適応が図られ、不登校や中退の防止につなげることができます。

中学校1年生の早い時期から高等学校調べや学校見学、体験入学、合同説明会、部活動体験などを通して、生徒が必要な情報を得られるようにしましょう。中学校と高等学校とが連携した進路指導を行うことが効果的です。

### (2) 合格発表後すぐに引継ぎができるように計画を

高等学校は、入学する生徒が安心して、学校生活を送ることができるようになるために、必要に応じて合格発表後に中学校を訪問したり、中高連携会議を行ったりすることができます。中学校は学習の状況、行動の様子、出欠の状況、友人関係など、高等学校が必要としている情報を伝え、中高間で共通理解を図りましょう。仙台市立学校間では「仙台市立中高連携サポートシート」を活用できます。(16ページ参照)

## コラム

### 「学びの場」と「進学」について

中学校在学中や中学校に進学する時に、特別支援学級から通常の学級に学びの場を変える相談をする場合があります。そんな時に大切なことは、社会生活に必要なスキルを身につけることと、受験を考えて学力をつけることのバランスをどのようにとるのかを検討することです。小学校の頃から保護者・本人とじっくり相談を重ねましょう。

中学校は小学校に、中学校卒業後の進路についての情報提供をしましょう。

■知的障害特別支援学校高等部への出願は、療育手帳の写し等で知的障害を証明する必要があります。  
事前に希望校に相談することが大切です。

■特別支援学級に在籍する生徒が高等学校への進学を希望する場合は、その手続き等について、管理職を通して希望校に確認しましょう。特に私立高等学校の場合は受け入れ状況についても確認しましょう。

※ 特別支援学校高等部や高等学園へ進学を希望する際は、出願等について「仙台市立鶴谷特別支援学校高等部入学者募集要項」「宮城県立特別支援学校の高等部入学者募集要項」他、進学を希望する学校の募集要項を確認する必要があります。

## 2

## 「中学校→高等学校等」をつなぐために【おさえたいこと】

## (1) 高等学校等の教員が知りたい生徒の情報

生徒が高等学校入学後に安心して学校生活を送るために、中学校と高等学校は情報交換を行いましょう。高等学校によって単位取得等の仕組みが違っている場合もありますが、どのような配慮や支援が可能か、保護者と中学校と高等学校が共に考えていく姿勢が大切です。そのために中学校は高等学校に、生徒の障害の状況や興味関心などの他にも、以下のような情報も伝えましょう。



- 中学校で行っていた学習面や生活面での指導と支援や配慮は何か。
- 本人・保護者が高等学校等に望むことは何か。
- 中学校で、これまでにあった対人関係のトラブルはどんなことか。など

## (2) 配慮が必要な生徒が新たにでてきた場合の中高連携

中学校から引継ぎのあった生徒以外にも入学直後の面談や学校生活の様子から、配慮が必要であると気づくことがあります。

入学してすぐ「学校の雰囲気がイメージと違っていた」「人間関係がうまく作れない」などの理由から、高等学校の生活に意欲が持てない、遅刻や欠席が続くなど、様々な課題に直面する生徒がいます。その場合はその生徒を深く理解している中学校と積極的に連携して指導や支援に当たる必要があります。また、中学校に依頼するばかりでなく高等学校からも生活の様子を伝える等、双方向の連携に努めることが大切です。必要に応じて中高連携会議等を実施して、入学後も継続的に中学校と高等学校とが連携して支援体制の充実を図りましょう。

## コラム 特別支援学級在籍生徒の「評価」、「調査書」について

## ■評価基準

特別支援学級在籍で、いわゆる「準ずる教育」(学年相応の学習内容)を受けている生徒を評価する場合は、小中学校学習指導要領の内容に対しての絶対評価となります。各学校の評価基準に照らして評価する必要があります。

## ■使用する指導要録の様式（公簿）

特別支援学級在籍で、いわゆる「準ずる教育」の場合は、「様式：特中1」を使います。(弱視、難聴、肢体不自由、病弱・身体虚弱等で使うことがある様式)

知的障害のある生徒に対する教育を行う場合は、「様式：特中2」を使います。

## ■高等学校へ出願の際の調査書

指導要録の内容に基づいて作成することが原則となります。詳細については出願先または教育委員会に相談することが大切です。

## ■副申書を活用

特別な教育課程を編成している生徒の場合は、副申書で学習の状況等について伝えることが大切です。副申書を大いに活用しましょう。



### ③ 「中学校 → 高等学校等」をつなぐための【具体的取組】



中学校から高等学校等へスムーズな移行ができるように、仙台市教育委員会や中学校と高等学校等において次のような連携の取組がなされています。

#### 〈取組の参考例（進路指導年間計画）〉（通常の学級を中心に）

学年	時 期	名 称	内 容
1・2年	6月～7月	教育相談・二者面談	
		※特別支援学級の生徒はこの時期に学校見学等を行い、より具体的に進路先のイメージを持つようにします。	
	10月	高等学校調べ（1学年）	公立・私立、普通科、専門学科、全日制・定時制・通信制等の違いを学習する。
		職業体験学習（2学年）	将来の生活について考える。
	11月	教育相談・三者面談	
	2月	進路希望調査	進路希望調査を記入することで自分の考えを深める。

学年	時 期	名 称	内 容
3年	6月～7月	教育相談・二者面談 進路希望調査	この時期に志望校を絞り込む。
		オープンキャンパス 高等学校説明会 高等学校調べ	高等学校からの案内をもとに、高等学校を見学し、高等学校の授業や部活動を体験する。 高等学校が本人・保護者・中学校に対して受験に関する情報提供を行う。
	11月～12月	教育相談・三者面談 進路希望調査	複数回の相談を通して志望校を決定する。
		教育相談・三者面談 高等学校出願	市立高校希望の場合は中学校から保護者に相談し「サポートシート」の作成を検討する。
	1月～3月	私立高等学校推薦入試・一般試験 公立高等学校の前期・後期選抜入試 定時制、通信制、サポート校、高等支援学校等の入試	
		中高間の引継ぎ 高等学校の入学式（4月）	高等学校は、中学校訪問等を通して、生徒の情報を共有する。 市立高校の場合は「サポートシート」を活用して中高間で引継ぎをする。

※特別支援学級の場合、中学校1年生の時から継続して教育相談を行ったり、特別支援学校の学校見学会（例年5～7月頃）へ生徒、保護者、担任で参加したりしましょう。特別支援学校の情報を多く得ることで、生徒や保護者がじっくり進路を考えられるようになります。

※「サポートシート」については次ページを参照して下さい。

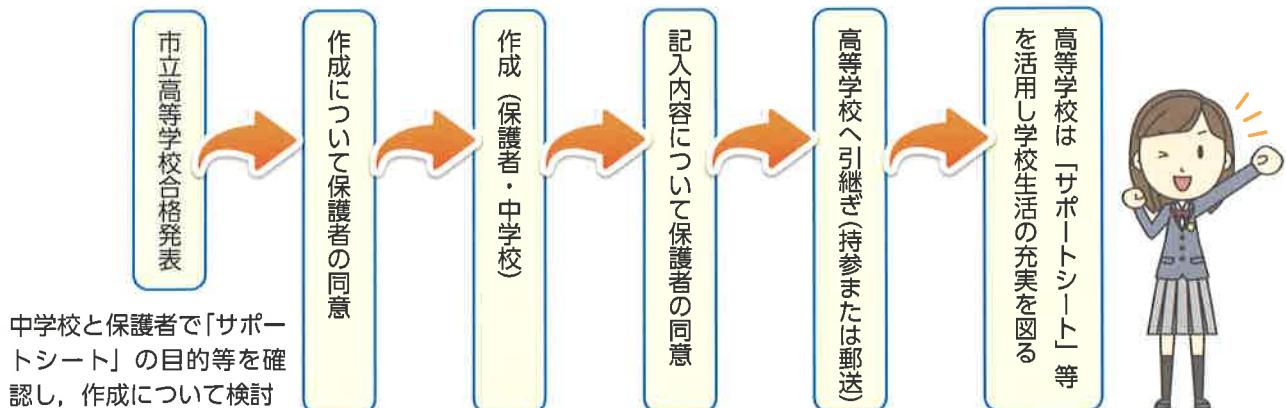
## 4 「中学校 → 高等学校等」をつなぐための【おすすめツール】

### 「仙台市立中高連携サポートシート」(以下「サポートシート」)

支援の必要な生徒等を理解し、適切な支援を組織的・計画的に行うために「サポートシート」を活用すると便利です。仙台市立中学校から仙台市立高等学校へ進学する場合に活用できる仕組みです。

中学校在学中に継続してきた相談や支援の状況を高等学校へ引き継ぐことが重要です。相談が深まらなかつたり十分な支援が行えなかった生徒の実態のみを引き継ぐ仕組みではありません。

なお、仙台市立学校間で活用できる仕組みですが、他の高等学校へ進学する場合も、考え方や手順が参考になります。



様式 1 《仙台市立中高連携サポートシート》中学校記入用 (記入例)

ふりがな 氏名 (性別)	○○ ○○ ○○ ○○	出身中学校 卒業年度	仙台市立 ○○ 中学校 平成 ○年度卒業
(生年月日)	(男 ♂) 学級担任氏名印	【職名: 教諭】 氏名 ○○ ○○ 印	
	校長氏名印	氏名 ○○ ○○ 印	

「仙台市立中高連携サポートシート」を用いて進学先である 仙台市立○○高等学校 へ引継ぎをすることに同意します。

中学校から市立高等学校へスムーズな引継ぎを行うための資料です。各項目について記入する。  
具体的な状況や配慮事項の欄では、特に気になる項目について記入する。

平成 ○年 ○月 ○日

保護者氏名 ○○ ○○ (続柄 父) 印

1 生徒は、自分の障害を理解・受容しているか

- 本人は、障害を理解し、受容している。
- 本人は、障害を理解しているが、受容していない。
- 本人は、障害を理解していない、もしくは、受容していない。

ここでいう理解とは、「自分の状態、特性を分かっている」こと。  
受容とは、「自分の状態等を客観的かつ現実的に認めた上で生活を送っている」ことを表す。

2 生徒は、サポートシートを用いた引継ぎについて知っているか

- 高等学校へ提供することを、本人に説明し、了解を得ている。
- 高等学校へ提供することを、本人に説明したが、了解を得られなかった。
- 高等学校へ提出することは、本人に説明していない。

3 入学当初に、特に知っておいて欲しいこと(主な課題)

(例)

- ・保護者は、本人に障害名を伝えている。しかし、学校には伝えていないと本人に話をしてしまう。学校が十大と相談や話をすると、本人は障害名に触れない配慮が必要である。
- ・分からないことがあると、何度も確認する。
- ・不安に思うと、次のことに進めなくなるが、不安を取り除くような声掛けを多くすると安定し

進め方や記入例等はグループワークから入手できます。

「文書管理」→「特別支援教育課」→「中高連携サポートシート」

## 5 「中学校 → 高等学校等」が【うまくつながった事例】



### 事例 孤立→不登校→中退とならないために

#### 子どもについて

- ▶ 中学3年生男子。広汎性発達障害。単位取得に不安を感じていた。
- ▶ こだわりがあり、思うようにいかないとイライラしてしまい、友達関係等でトラブルになることがあった。
- ▶ 保護者は障害を含めて子どもをよく理解している。本人・保護者とも高等学校の生活に不安や心配があった。

#### 高校入学後に 予想されたこと

- ▶ 高等学校生活になじめず、新たに良好な友達関係を築くことができずに、孤立→不登校→中退になってしまったこと。

#### 具体的に 取り組んだこと

- ▶ 中学校では学校調べやオープンキャンパス等を通じて、本人の学力や適性等に合った学校を選ぶ等、適切な進路指導を行った。その際、「サポートシート」の有効性を保護者に説明した。
- ▶ 合格発表後、中学校から高等学校へ連絡し、「サポートシート」等を用いて、この生徒に関する情報の引継ぎを行った。
- ▶ 高等学校では「サポートシート」を活用した引継ぎの後、全職員で生徒の情報共有を行った。
- ▶ 高等学校はこの生徒が高等学校生活で悩んだ時に、中学校を訪問したり、元担任教師等に連絡を取りながら、生徒の悩みや問題の対応にあたるようにした。

#### 高等学校 入学後の様子

- ▶ 高等学校では学習を頑張り、ほぼ休むことなく登校することができた。長期の休みではアルバイトをするなど働くことに意欲を持つようになっている。
- ▶ 進路の学習では、自分が興味を持っている業種の専門学校について自ら情報を収集するなど、主体的に取り組んでいる。

## コラム

### 公立高等学校入学者選抜における受験上の配慮申請について

- ① 中学校長は配慮を要する者の学力検査等について、事前に高等学校長と電話などで連絡・調整の上、「受験上の配慮申請書」によって申請します。
- ② 中学校は受験上の配慮申請をする場合、申請書の他に配慮内容の妥当性を示す資料（診断書、中学校での学習や生活の様子、配慮した内容等を記載した副申書など）の添付が必要になる場合があります。
- ③ 受験上の配慮申請は審査に時間がかかる場合があります。出願前に申請手続きを終えられるように早めに高等学校と相談をしましょう。詳しくは、9月下旬に公表される「宮城県・仙台市立高等学校入学者選抜方針」を参照してください。

#### これまでの例について

- ・弱視のため、座席を一番前にした。
- ・難聴のため、英語における「放送によるテスト」をポータブルCDプレーヤーで実施した。
- ・病気のため、インスリン注射ができる場所を確保した。



# 「高等学校等→卒業後の生活」をつなぐ

## 1 「卒業後の生活」へつなぐために

### (1) 小中学校の時から長いスパンで進路を考えることが重要

社会へ巣立つ時期が近づいてから進路を考えるのではなく、より長いスパンで進路相談・進路指導を行うことが大切です。高等学校・高等部入学後はもちろん、小中学校でも、折に触れて将来の生き方を話題にしてください。

### (2) 知りたい、知らせたいのは具体的な情報

企業や学校、福祉事業所が知りたいことは、「本人が困った状態になった時に、このように支援すると上手くいく」とか「このような支援のやり方はかえって本人が混乱するので、NG」などの具体的な情報です。これは、それぞれの学校在学中にも必要だった支援であり、その内容を引き継いでいくことが安定した生活につながります。



## 2 多様化する卒業後の生活とその支援

### (1) 多様な選択肢

障害の有無や程度にかかわらず、何らかの支援を受けながら高等学校や特別支援学校高等部を卒業する生徒には、どんな進路が考えられるのでしょうか。近年、選択肢は多様化しています。(2ページ右下の図参照)

進学先は、大学や専門学校の他に障害者職業能力開発校等があります。一般企業への就職には、障害者雇用の制度を活用する場合とそうでない場合があります。学校を卒業してすぐに就職が難しい場合には、就労移行支援事業所などの障害者福祉サービス（福祉事業所）を利用して就職することもあります。最近は、大学や専門学校を卒業したあとに障害者福祉サービスを受けながら就職を目指すケースも増えてきました。

### (2) 進学の場合

大学や専門学校でも、発達障害のある学生やその特性によって支援を要する学生が少なからず学んでいます。高等学校までの学習と比較して自由度の増したカリキュラムが戸惑いにつながって、十分な単位を取得できないケースや、「学級」といった枠組みが弱いため所属感を得られにくい環境で孤立してしまうケースなどが見られます。

そのような問題に対応するため、最近は多くの大学に学生生活をサポートする仕組みが出来ています。入学後に相談窓口を利用することはもちろんですが、入学が決まった段階で高等学校の先生と本人が一緒に大学の相談窓口にコンタクトしておくことは入学後の安心につながります。進学先を選ぶ段階で各大学の支援システムを調べておくことも必要でしょう。

### コラム

#### 大学入学試験の際の配慮事項

大学入試センター試験をはじめ、各大学の入学試験において配慮申請ができる内容が増えてきました。例えば、大学入試センター試験における発達障害に関する配慮事項には、試験時間の延長・チェック解答・拡大文字・注意事項等の文書による伝達・別室の設定等が想定されています。申請に際しては診断書の他に高等学校での支援の状況等を文書で提出する必要があります。

受験上の配慮申請は審査に時間がかかる場合があります。出願前に申請手続きを終えられるように早めに相談をしましょう。

※ 大学入試センター試験については「受験上の配慮案内」を参照の上、詳細は大学入試センターへ問い合わせてください。他、大学ごとの申請についての詳細は各大学へお問い合わせください。

### (3) 一般企業への就職の場合

障害者手帳を活用して、障害者雇用の制度で働く場合は、企業側も様々な配慮を想定している例が増えてきました。この場合は出来るだけ早い時期から本人の特性を企業に伝えながら就職活動をすることで、職務内容と本人の特性のマッチングが図りやすくなります。障害者雇用の制度を活用しない場合でも、特性に応じた支援を求めることが可能な場合があります。



### (4) 福祉事業所の利用の場合

障害者福祉サービスの状況は、ここ数年で大きく変わっています。平成25年に「障害者総合支援法」が施行され、障害の対象が大きく広がったり、障害者福祉サービスの利用の仕方も大きく変わったりしました。必ずしも障害者手帳を持っていなくても福祉サービスを利用できる場合もあります。

一般企業への就職を目指す就労移行支援事業、一般就労と同じ雇用契約を結ぶ就労継続支援A型事業、雇用とは違う形態で仕事をする就労継続支援B型事業、より障害の重い方向けの生活介護事業と、サービスは多種多様です。仙台市内には全事業合わせて100を超える事業所があり、特に就労移行支援事業所が増える傾向にあります。事業所と連絡を取り、実際に話を聞いたり、見学をしたりするのがよいでしょう。早い段階から保護者が、「社会人になった時どのようなサービスがあるか知りたい」と考えている場合もあるので、きちんと説明できるように情報を収集しておくことが必要です。

また、福祉サービスを利用する場合、相談支援事業所を利用されているケースも増えてきています（相談支援については20ページ参照）。特別支援学校の進路担当者やコーディネーター多くの情報を持っています。

※ 就労に関する相談は、仙台市障害者就労支援センターや宮城障害者職業センターでも受け付けています。

## 3 「高等学校等→卒業後の生活」へつなぐための【具体的取組】

### (1) <取組の参考例（高等学校）>

時 期	内 容
入学直後から	引継ぎ資料や進路適性検査をもとに、生徒理解に努める。
	保護者とも面談し具体的な支援について相談する。
進路決定に向けて	進学希望先の大学等が、どんな支援が可能か、相談窓口に行って相談する。
	ハローワークによる面接指導や小論文作成指導、インターンシップを行う。
卒業時に	本人・保護者と相談し、企業にどんな支援を求めるのか、障害者雇用の制度を活用するのか検討する。その上で企業が求めることとのマッチングを図る。

## (2) &lt;取組の参考例 (特別支援学校高等部)&gt;

時 期	内 容
入学直後から	進路担当と学級担任とで協議、情報共有し、ニーズの聞き取りを行った。
	相談支援事業所と連携してケア会議を開くなど、卒業後の支援も念頭において相談支援事業所との関係づくりを進めた。
進路決定に向けて	「個別の教育支援計画」を使って、本人の情報を事前に実習先や進学先に伝えた。
	実習終了後、実習先に評価票を作成してもらい、実習の成果や課題を把握した。それらをその後の指導に生かし、支援を継続した。
卒業時に	個別の移行支援計画(卒業期用)を活用し、進路先・相談支援事業所へ引き継いだ。

## 4 「高等学校等→卒業後の生活」へつなぐための【おすすめツール】

## 個別の移行支援計画(卒業期用)

高等学校卒業時に作成し、進路先へ提供する資料となります。配慮すべきこと、現在の状況など、知っておいて欲しいことを簡潔に記入します。



個別の移行支援計画(卒業期用) 記入例		3年〇組			
氏名	〇〇 〇〇	就労継続B型事業所「〇〇〇〇」			
進路先	本校卒業後の生活についての本人の希望	お金を貯めて、旅行したい。			
卒業後に必要なと思われる支援内容	職場で働く力をつける 一人で生活する力 お金の管理を手伝う	各学校で様々な様式が使われています。この様式は一例です。それぞれの学校や地域の実情に合わせて工夫してください。			
その他	卒業後に希望する支援体制				
	家庭	進路先	地域・余暇	医療・健康	学校(出身校)
	・簡単な炊事や洗濯、掃除などができるようにする。	・あいさつ、誕生日、時間を守ることなどを強くして基本的なことを確実に行えるようにする。	・〇〇支援センターで家庭の支援についての助言を受ける。	・〇〇病院で月に一度定期通院をしている。	・本人や就労先から状況を聞き、必要な助言を行う。

※様式は、グループウェア→文書管理→特別支援教育課→個別の教育支援計画 から入手できます。

## コラム

## 生涯にわたって支援や相談をつなぐしくみ

## ■相談支援事業所

地域には、障害者の相談窓口として「相談支援事業所」があります。仙台市には40を超える相談支援事業所があり、福祉サービスの利用についての相談や、地域での自立した生活に移行・定着するための支援等を行っています。利用したい場合は、相談支援事業所に直接連絡を取るか、各区役所やアーチルに連絡を取る方法があります。在学中から相談支援事業所とつながっている家庭が増えています。相談支援事業所が計画するケア会議に担任の先生が参加する場合もあります。相談支援事業所については、仙台市で発行している「せんだいふれあいガイド」に掲載されています。

## ■仙台市発達相談支援センター(アーチル)

高等学校在学中までは主に「学齢児支援係」と連携しますが、アーチルには「成人支援係」があり、高等学校卒業後の社会生活を支える窓口になっています。「成人支援係」は各関係機関と連携しながら、就労支援システムの下支えの役割も行っています。

## ■ 編集後記

子どもたちは年齢や成長と共に、幼稚園等から小学校、中学校、その次のステージへと進んでいきます。

本資料は各ライフステージ間でどのような連携があれば子どもたちが安心して、よりよい学校生活を送れるか、将来につながるかという視点でいくつかの例を紹介しています。充実した支援と丁寧な相談を次のステージにつないでいく手法や、つなぐ時に役立つツールにはどんなものがあるかを知っていれば、子どもたちが次のステージへ進む時に安心して送り出したり、受け入れたりすることができます。

子どもたちの健やかな成長と、将来の充実した生活のために、本資料が活用されることを願います。 (吉田 記)

## ■ 文献

- 平成26年度版 仙台市の特別支援教育  
仙台市教育委員会
- 平成24年度特別支援教育推進資料  
こんなとき どこと連携 Q&A24  
仙台市教育委員会
- 平成22年「スタートカリキュラム」のすべて  
— 仙台市発信・幼小連携の新しい視点 —  
木村 吉彦 (監修) 仙台市教育委員会

## ■ 編集委員

### 編集委員長

仙台市立折立中学校

教諭 吉田 敬二

### 副編集委員長

仙台市立松陵中学校

教諭 中村 友紀

### 編集委員

仙台市立燕沢小学校

教諭 佐藤 真知

仙台市立中野栄小学校

教諭 新谷 千尋

仙台市立将監中学校

教諭 山口 敬宏

仙台市立仙台大志高等学校

教諭 高橋 義則

仙台市立鶴谷特別支援学校

教諭 千葉 雅彦

仙台市立鶴谷特別支援学校

教諭 相澤 学

仙台市北部発達相談支援センター

主査 先崎 智

## 事務局

### 仙台市教育局特別支援教育課

課長 赤間 宏子

主幹 杉肇 一郎

主任指導主事 秋山 健造

指導主事 齋藤 美香子

菅澤 智之

渡部 隆亮

山田 亮

遊佐

平成 28 年 3 月 発行